

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2609 号 2015.8.31 発行

いじめた子にも残る十字架 漫画作者・五十嵐かおるさん 朝日新聞 2015年8月31日

(C) 五十嵐かおる/小学館



いじめについて考えるシリーズ。朝日新聞デジタルのアンケートで若者たちは、いじめに向き合ってきた学校の姿勢や、これから大人に何を望むかについて様々な意見を寄せてくれました。多くの女の子から支持を集める漫画「いじめ」の作者、五十嵐かおるさん（36）にも作品に込めた思いを聞きました。

■五十嵐かおるさんに聞く

女の子のいじめがテーマの漫画を10年前から連載しています。私が学生だったころは「いじめられる側にも理由がある」と言われ、違和感を感じていた。「いじめはいじめられる側が悪い」。それを伝えた

かった。

雑誌は恋愛ものやギャグもあり、いろいろな人が読む。いじめに無関心な子や今いじめている子にも読んでもらい、「いじめはダメだ」と思うきっかけの一つになればと思って描いています。

登場人物は小中学生の女の子で、読者も同年代の子が多いです。みんなに分かりやすいよう、現実の生活で身近なLINE（ライン）や学校のカウンセラーによるいじめアンケートなども作品で扱っています。

今年の春、読者の女の子4人と会いました。フリーペーパーを作っていて、私に話を聞きたいと来てくれた。その中に、いじめを受けた子や不登校の子もいました。彼女たちが「いじめはあるもの」と達観して話していたのがショックだった。「いじめられた子がどんな嫌な思いをするかが分かり、私も成長できた」と言う子もいてすごく切なくなりました。

私自身は、いじめられて苦しんだ経験もいじめた経験もありません。だからつらさを想像するしかない。私はアシスタントをお願いせず1人で描いていますが、それはいじめられている主人公の気持ちにできるだけ寄り添いたいから。主人公の苦しい顔のアップを描く時が一番苦しいです。

毎回、主人公が少し前向きな気持ちになって終わります。その前に彼女は必ず何かを乗り越える。今いじめに遭っている子には、それを疑似体験してもらいたい。あなたも乗り越えられるから大丈夫。そう思って描いています。

シリーズのうち『いびつな心』の回では、いじめられていることを親に言えない女の子を、『光と闇の境界線』ではいじめを笑顔で我慢する子を描きました。いじめられると苦しくてどんどん閉じこもっていったらと思う。親にまで拒否されたらどうしよう、こんな

姿を見せたくないと思う人や、心の痛みがなかなか自覚できず頑張っちゃう人もいますでしょう。でも我慢しないで、まず自分が自分を救って。相談すれば誰かが真剣に考えてくれる。「あなたは一人じゃない」。作品で毎回伝えたいことです。

今までにたくさんのお手紙をもらいました。忘れられないお手紙は、以前いじめをしていたという女の子からのものです。

その子は、けんかがきっかけで周りに呼びかけて友達を無視し始めたそうです。友達是不登校に。でもいじめたことを彼女は忘れてしまっていた。その後、先生から「迎えに行きなさい」と言われて気づき、今は毎日家まで行き謝罪を続けている——と書いてありました。シリーズに『未来への贖罪（しょくざい）』という回があります。いじめられた同級生が自殺してしまい、傍観者だった主人公が苦しむお話。手紙の子はそれを読み「いじめられた側の気持ちを考え、私も苦しもうと思う」と書いていた。

いじめをした記憶は本人に一生残る十字架。いじめた側も傷つける行為だと思います。今回のアンケートで「いじめっ子は家庭でのストレス発散や連帯感を高めるためにやっている」という回答がありました。その時の感情を優先して、結果的に取り消せない傷を自分自身に負わせないでほしい。傍観している子は、2人、3人と集めて反対の声を上げて。1人だと怖いけど、いじめっ子に対抗する人たちが複数になれば状況は変わるはずです。

「いじめ」のストーリーは体験談を取り込まず、すべてフィクションです。悲しいけど実体験では明るく解決する話がまだまだ少ない。LINE（ライン）上の嫌がらせなど周囲の目が届かないところで簡単に行われてしまういじめは今後も起こってしまうかもしれない。でも一人ひとりがいじめは絶対によくないと思えたらいじめは必ず減る。そう信じています。（聞き手・藤田さつき）

79年、新潟県生まれ。05年から隔月刊の小学館「ちゃおデラックス」でシリーズ「いじめ」を開始。現在も連載中で、関連本を含めた売り上げは累計230万部にのぼる。

■寄せられた意見

今回も小中高校生、大学生など「その他学生」から寄せられた意見です。いじめは、恋愛のように「集団のなかで普遍的な現象だ」とする、次のような指摘がありました。

●女子高校生「一番危険なのは、『いじめをなくさなければならない』というプレッシャーを学校組織に与えることで、生徒も教師もそれを隠蔽（いんぺい）するようになってしまいうことではないか」

●その他学生の男性「『いじめは必ず起こる』と考え、早期発見と適切な対処にこそ力を入れなければならない」

●その他学生の女性「嫌いな人や苦手な人がいるのは人間として当たり前の仕方がないこと。否定することなく受け止めることから始める必要があると思う。『嫌だ、嫌い』をいじめという形ではなく他の形で解消できるよう、逃げ道を提示してあげることが周りにはできるだろう」

次は、被害者の思いです。

●女子中学生「いろいろなことが重なってしまい、今は『ぼっち』です。仲の良い子を1人は同じクラスにするなど、環境を良くしてあげることによってなくなるいじめもあるという事を大人の人に知ってもらいたいです」

●中学の時に部活仲間から半年無視されたというその他学生の女性「家族や先生がいじめの存在に気づき話を聞いてあげるだけでも、だいぶ楽になると思う」

教育への提案が多くあります。

●無視や陰口を経験したその他学生の女性「日本では個性を大事にする教育観は少なく、みんな平等に育てられる気がする。そこから何か周りと違うと、ねたみ・嫉妬、世間知らず・非常識、ストレス解消など様々な理由で出る杭は打たれるようにいじめが起こってしまうと思う」

●男子高校生「弱者と強者という世界観からいじめをゲームのように楽しむ輩（やから）もいる。正義は勝つ、天誅（てんちゅう）が下る、仏神などの絶対的な存在への畏（おそ）

れ、宗教や道徳教育は幼少時に必要かもしれない」

その他学生のみなさんは、高校までの体制を問題にしています。

●男性「クラスという環境は、外部から閉ざされているため、いじめがあっても逃げる
ことができないし、発見が遅れる」

●男性「クラス制を廃止したらだいぶ改善するはず。せめて体育の授業を選択制にする
だけでも効果があるのでは」

いじめる側に厳しい対応を求める声も出ています。

●男子中学生「イジメをする奴（やつ）に罰を」

●その他学生の女性「そもそもいじめは犯罪であり、罰金や懲役などの罰を科さない限り
なくなるらない」

大人への注文もありました。

●女子高校生「大体、いじめは駄目だと言っている大人の世界でもいじめはあるじゃない
ですか。大人のいじめがなくなるのに子どものいじめが無くなるわけが無い」

●その他学生の女性「子供に悪口をいうなどしついても、大人は悪い手本しか示さないで
す」

●その他学生の男性「そもそも、日本社会そのものがハラスメント社会になっているわけ
で。それでもいじめをなくすためにがんばらなきゃならない」

●女子高校生「子供を守れるのは大人しかいないのですから、しっかり話を聞き、子供の
立場を考え、行動していただきたいと思います。自ら命を絶つことの苦しさを、そこまで
追い詰められた人の気持ちを考えてみてください」

「3回くらいいじめられた」という経験をもとに、大人の果たせるこんな役割を書いた
人もいました。

●女子高校生「自分がいじめられた時も、自分の夢が自分を救ってくれた。一人だけ、こ
うなりたいと思う大人に出会うこと。大人はその場所を提供すること、それが一番の解決
策ではないか」

夜泣き封じの柳がそよぐ 今回の案内人 亀井澄夫 日本妖怪研究所所長

大阪日日新聞 2015年8月29日

東成区東小橋 「大小橋命胞衣塚」 大小橋命胞衣塚。左の下に
写っている石碑が胞衣塚である

街の中にある石碑や塚の中では、今回の東成区東小橋にある大小橋命胞衣塚（おおおばせのみことえなづか）が、一番立地が良いのではないかと思います。大きな交差点の北西角にあり、もし店舗にしたなら、角地で商売も繁盛していたかもしれない場所なのだ。

なぜ、街のいい場所に残しているのかと言うと（勝手な臆測ですが）昔から、この胞衣塚に触るとたたりがあると
言われていたから。それでも少し南に移動させたことがあったらしく、そのとき、近所に災難が続いたので、慌てて元の位置に戻したという。『撰津名所図会』には、胞衣塚のたたりで3人も病気になるって、頭の髪の毛が抜けたと記されている。

大小橋命とは、父が中臣（なかとみ）の雷大臣命（いかつおみのみこと）で、藤原氏と中臣氏の先祖にあたる人。この塚の近くにある産湯稲荷（うぶゆいなり）神社には、彼の使った産湯の井戸もある。

また胞衣（えな）とは、胎盤や卵膜、羊膜のことで、当時は出産後7日目に、これらをつぼやおけに入れて土に埋めるという風習があった。この埋め方が悪いと子どもが夜泣きすると
言われていたので、意外と神妙な儀式だったのかもしれない。また、胞衣を「よな」



と呼んで「夜泣き」と結びつけたとも言われている。

ここには大きな柳の木があり、枝が塚に垂れ下がっている。夜中に通ると、ちょっと不気味かもしれない。古くから言い伝えられている胞衣塚の柳がこれだと思うが、この柳が夜泣き封じに効果があると言われ、記録にはないが、柳の葉を持ち帰って子どものための何かに使っていたらしい。

大小橋命にまつわる話は、この地に多い。しかし、ほとんど言い伝えの域を出ず、墓にも諸説あり多くは謎のままだ。でもきっと、この柳は知っているにちがいない。カメラを向けると「私も写して」と言わんばかりに風になびいて割り込んできた。

妊婦のため“官民協同” 「ゆりかごタクシー」注目 大阪日日新聞 2015年8月30日

大阪市の旭区役所が日本タクシー（本社・旭区赤川1丁目）と連携し、区内の妊婦を対象にした「旭ゆりかごタクシー」を始めた。事前登録し、いつでもスムーズに通常のタクシー料金で利用できるのが特長。“官民協同”による妊婦のためのタクシーは市内で初めてで、周辺区からも注目を集めている。

「陣痛が始まり、タクシーを呼んだら断られた」－。同サービスのきっかけは区民の声。妊婦の直面する問題を知った小川明彦区長の指示で滋賀県の先進的な取り組みを学び、本年度の実施に向けて準備を進めてきた。

公募で日本タクシーを選定し、本年度から運転手らを対象にした助産師による研修会や、防水シートの提供を行った。

防水シートを敷き、妊婦も安心して利用できる「旭ゆりかごタクシー」

■安心のお守り

日本タクシーは、以前から妊婦に対して一般の利用者同様の送迎を行ってきた。金子孝美常務は「旭区の会社として区民のために少しでもできることがあればしよう」と公募に手を挙げた理由を説明する。

本社の運転手450人が研修で妊娠・出産の基礎知識や配車から送迎までのマニュアルを学び、「365日24時間」の体制を実現。専用回線を設け、連絡を受けた社内オペレーターはすぐさま衛星利用測位システム（GPS）で登録者宅近くを走るタクシーを調べて連絡することで、「スムーズ」も心掛ける。

6月のスタートから約3カ月で旭区民57人の登録を受け、うち11人を無事病院まで搬送した。登録しても必ず使用する必要はなく、金子常務は「安心のお守りにしてもらえればうれしい」とアピールする。

■大きなやりがい

ドライバー歴24年の厚見和栄さん（66）は8月中旬、昼前に区内を走行していて「ゆりかごタクシー」の連絡を受けた。妊婦は「陣痛間隔5分で、すでに破水」。研修内容を思い返しながらか「安全第一」と落ち着いて対応。妊婦が「痛い」と声を上げると、「大丈夫」と励ましながらか病院まで送り届けた。

厚見さんは「研修があるので今まで以上に焦らず対応できたし、出産のお手伝いは大きなやりがい」と胸を張る。

同社によると近隣の区からの利用の問い合わせも増えており、区事業のため登録はできないが「連絡いただければ、送迎させていただきます」（金子常務）と回答しているという。

区保健福祉課子育て支援グループの近藤義彦担当課長は「すでに他の区役所からの問い合わせもあり、将来的には連携し広げていくことも考えたい」と話していた。



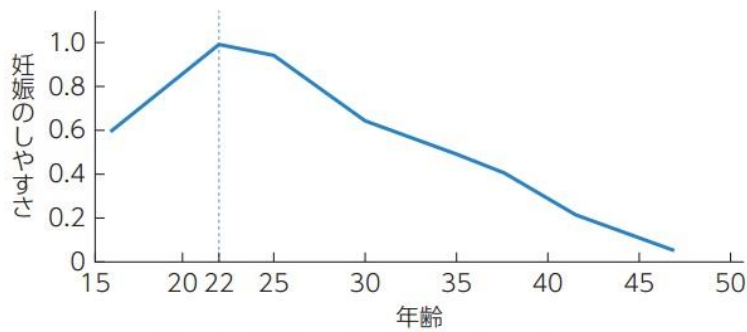
「妊娠しやすい」年齢を教えることだけが性教育なのか

永田夏来 / 社会学

シノドスジャーナル 2015年08月31日

22歳が妊娠のピーク！？文科省が改訂した「保健教育」の高校生向け副教材で、女性の妊娠のしやすさと年齢による変化を表す折れ線グラフの表記ミスがあった。今回の騒動から見える、日本の性教育の現状について社会学者の永田夏来氏に話を伺った。(聞き手・構成／山本菜々子)

女性の妊娠のしやすさの年齢による変化



22歳時の妊娠のしやすさを1.0とする

(O'Connor et al. 1998)

グラフの問題点

(文科省 HP:「健康な生活を送るために」19 家族社会・20 妊娠出産 (p38~p41) より転載)

——今回、グラフの数値が元のデータと大幅に違っていたことが問題になりましたね。

そうですね。基のデータを見る限り、20代前半、22歳と25歳とはほとんど値は変わらないように見えますし、30代になっても急激に落ちている

わけではありません。「グラフを単純化して見やすくした」という範疇は超えていると思います。「改ざん」と言われても仕方ないかもしれません。

それ以上に、今回のグラフの最大の問題点は、出典がわからないことでしょう。(O'Connor et al. 1998) となっていますが、この論文で紹介されているのは違う論文のデータです。つまり、孫引きですね。

有村治子少子化担当相は「医学的、科学的に正しい知識を学校教育で伝えたい」との意向のもと、保健体育の副教材として導入したようです。しかし、「医学的、科学的に正しい」とされる知識の出典がよくわからないというのはおかしいでしょう。

最近では、インターネットを使って様々な検証が行われています。私の友人の研究者もどの論文からの引用なのか調べており、だいたいの見当はついているようですが、今回、データを提出したとされる吉村氏は、説明責任を果たすべきだと思います。

——そもそもグラフの数値についてはどうでしょうか。

このグラフは1998年の論文を基にしたものだと言われています。避妊をしていない女性がどれくらい妊娠しやすいのか調べたもののようです。

元の論文にもありますが、このグラフはセックスの回数頻度が情報として勘案されていません。また、文化や歴史的状況による影響を踏まえてとらえる必要があるデータです。端的に言うならば、20代前半だとセックスする頻度が高いけれども、年齢と共にセックスする回数が少なくなっているため、妊娠も少なくなっているという程度のことを表しているとも読めます。

しかし、副教材での使われ方は非常にミスリードです。

グラフの横には

医学的に、女性にとって妊娠に適した時期は20代であり、30代から徐々に妊娠する力が下がり始め、一般に、40歳を過ぎると妊娠は難しくなります。一方、男性も、年齢が高くなると妊娠に関わる精子の数や運動性が下がり始めます。

と書かれています。保健体育の教科書であることを踏まえてこのグラフをみると、生理学的な事実として、妊娠のしやすさが22歳をピークに下がっていくように見えます。非常に

ミスリードです。

——多くセックスしている年代が、確率的に妊娠しやすい。「妊娠する力」と言われると、セックスすると何パーセントの確率で子どもが出来る……という話だと思ってしまうが違

うと。そうす。その意味の統計を取るならば、他の条件は同じでないとおかしいはずすし、妊娠だけではなく、どのくらいの確率で出産・流産したのかなども含めないと「医学的に女性にとって妊娠に適した時期」を示せないと思います。

——つまり、出典も明らかにされていないし、グラフは「改ざん」と言われても仕方がない。その上に、「妊娠しやすさ」というにはミスリードな数字であると。ちなみに、「妊娠しやすさ」のグラフがこれしかないというわけではないんですよ。

そんなことはないと思いますよ。他にデータを持っている産婦人科医もいるでしょうし、保健衛生や人口学の研究者も同様でしょう。

それにも関わらず、なぜセックスの頻度などをコントロールしていないデータなのか。しかも、1998年の外国の論文で、その上、出典のあやふやなものを使う必要があるのか疑問です。

今回のグラフが「手違い」とするならば事前に防げたはずす。産婦人科医だけでなく、関連領域の研究者が普段からきちんとディスカッションしていれば、「医学的に女性にとって妊娠に適した時期」を高校生に示すためにはどういうデータが適切なのか、おのずと決まってくるでしょう。

当たり前の「性教育」を

この騒動で私を感じたのは、医学的観点と社会科学的観点の両方を含んだ性教育の必要性です。

子どもをもったり結婚・出産したりという人生の流れのことをライフコースと言います。ライフコースを考える際には、医学的な知見だけではなく、社会的な背景も不可欠です。

たとえば、フランスでは日本でいう小学校6年生から性教育がはじめられます。その際に重視されているのは、生物学、愛情、社会的な側面のすべてを踏まえるという姿勢です。

妊娠と年齢の関係といった生理的な話からはじまり、出産計画や避妊、性感染症などの情報を示しながら時間をかけてカップル関係をつくることをフランスでは教育しています。自分が生活している社会状況の中で、いつ子供を産むのが自分にとって適切なのかについて考える力をつけるのが、本当の性教育でしょう。

現在の日本では、「妊娠しやすさ」のグラフが示す通り、医学的な観点からの声が大きく、社会的な観点があまり議論されない性教育になっています。

日本社会をみてみると、高度経済成長期の頃は20歳台前半で結婚して子供をもつ人が多くいました。そのころは「女の賞味期限はクリスマスケーキ」などと言われたりして、「25歳を過ぎたら賞味期限が……」なんていわれていたんですよ。

女性は、高校を卒業して就職、もしくは短大を卒業して就職し、2、3年働いてから結婚して専業主婦になって……というライフコースが可能でした。

しかし、21世紀の現在は大学に行く女性も多くなっています。さらに、共働き家庭が増え、女性も働くモデルになっています。そんな中で、大卒の女性が大学4年~社会人1年目の間にかけて出産するのはあまりにリスクが高い。ただでさえ、新卒で就職し損なったらその後の選択肢が狭まってしまう状況すし、現在の若者はそうした現状をしっかりと自覚できていると思います。

ですから、仮に22歳が医学的に「妊娠しやすい」としても、それだけを高校生に伝えても「少子化対策」には到底なり得ません。

もし、どうしても22歳での妊娠・出産を推奨するのであれば、社会の方を変える必要があるでしょう。

子どもを育てられるような生活の基盤を、性別に関わらず20歳台前半で得られるようにするのは言うまでもないですが、他にも、出産、子育てをしながら大学に通えるようなシ

システムを整備する。年齢にかかわらず就職できる機会をつくる。考えるべき課題はいくらでもあるはずだ。

今回の副読本をきっかけに22歳で出産しても大丈夫だと思える方向に社会を変えていこうと議論するのならまだわかりませんが、そこまで考えてデータを出しているとは到底思えません。



今回の騒動では、グラフの数値の誤りを認めただけですし、それが意図的かどうかには主眼が置かれているように思います。しかし、ライフコースを考える上で、医学的知見が過剰に重視され、社会的な状況が無視されていることも見逃せない問題だと思えます。

「若者の性」白書-第7回 青少年の性行動全国調査報告- (教育単行本)
出版社: 小学館 (2013-08-01) 定価: ¥ 2,376 Amazon 価格: ¥ 2,376
単行本 (255 ページ) ISBN-10 : 4098401479
ISBN-13 : 9784098401475

永田夏来 (ながた・なつき) 社会学

1973年生まれ。社会学者。早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了 博士(人間科学)。現職は兵庫教育大学大学院学校教育研究科助教。専門は家族社会学で、妊娠先行型結婚を中心とした若者の恋愛、結婚についての調査研究をおこなっている。



「人権相談 電話して」 まもるくんが呼び掛け 大阪日日新聞 2015年8月30日

笑いの殿堂「なんばグランド花月 (NGK)」(大阪市中央区)のステージに29日、人権擁護イメージキャラクター「人KENまもるくん」と「人KENあゆみちゃん」らが登場し、本公演前に観客に向けて「何か相談があれば電話してください」と呼び掛けた。



NGKのステージに立つ「人KENまもるくん」と「人KENあゆみちゃん」ら=29日午前、大阪市中央区

吉本興業は法務省人権擁護局と連携し、6月から各地で人権啓発活動を行っている。大阪では25~30日、NGKで劇場スタッフらが人権啓発に関するパンフレットを配布。29日はロビーにブースを設け、1階入り口では両キャラクターが吉本の芸人の着ぐるみと一緒に「マンガで考える『人権』みんなともだち」

の冊子などを配った。

ステージには、オープニングアクトを務めたお笑いコンビ「へびいちご」の2人や両キャラクター、大阪府人権擁護委員連合会の進藤斗志代会長らが登壇。進藤会長は漫画家のやなせたかしさんがキャラクターの生みの親であることや、小中学校などで人権教室を開いていることなどを紹介し、「人権が守られることを願っている」と話していた。

職場から切手盗む 容疑の龍ヶ崎市職員逮捕 産経新聞 2015年8月31日

勤務先の龍ヶ崎市役所から切手2万8千円分を盗んだとして、竜ヶ崎署は30日、窃盗の疑いで同市役所社会福祉課の飯島洋介主幹(37)を逮捕した。

逮捕容疑は今年4月上旬から5月中旬ごろにかけて、勤務先のロッカーから額面140円の郵便切手200枚を盗んだとしている。

同署によると、飯島容疑者は「間違いありません」と容疑を認めている。

今年6月、同市から「社会福祉課で、生活保護費がなくなっている」との届け出があり、同署が捜査していたところ切手がなくなっていたことが分かった。

飯島容疑者は盗んだ切手を金券ショップで現金に換えていたという。

同署で動機などについて調べている。

同市の中山一生市長は「今後、事実関係が分かり次第、厳正に対処するとともに職員一人一人の規律保持を徹底させる」とのコメントを発表した。

夜間の避難路 検証 防災講座に障がい者参加、声聴く 琉球新報 2015年8月31日



防災講座で、夜間に障がい者と共に浦添市勢理客の避難路を検証する参加者ら＝17日、浦添市勢理客

【浦添】浦添市の神森中の生徒ら9人が昨年9月に作成した「勢理客の福祉安全マップ」を基に、障がい者や高齢者と共に地域の人たちが夜間に歩き、避難路がどうなっているのかを検証する防災講座が17日夜、行われた。翌18日は森の子児童センターでそれぞれの意見を持ち寄り円卓会議を開催。「坂道、狭い道、暗い道が多い」「昼間は見える段差も、夜になると見えない」などの意見が上がり、避難時は障がい者らへの支援の必

要性を参加者はあらためて実感した。

浦添市立中央公民館主催の防災講座で、地図を作った中学生をはじめ、車椅子利用者や視覚障がい者、ベビーカーで子どもと参加する人ら約25人が参加した。

森の子児童センターを避難場所と位置付け、三つのグループが三つのルートに分かれて約1時間かけて夜間の避難路を検証した。勢理客は急な坂や細い道が多く、外灯が少ない地域も多く見られた。

聴覚障がいのある糸数朝子さん(36)＝浦添市＝は「暗い所では平衡バランスが取りにくいので、危ないと思った。明かりがあった方がいいが、災害時は停電も考えられる」と、避難時の状況を想像していた。車椅子利用者の田畑秋香(しゅうか)さん(19)＝宜野湾市、冲国大2年＝は「ガードレールや電信柱など障害物が多い印象を持った。1人で避難場所までたどり着けない。中学生のサポートがあったからゴールできたと思う」と述べた。

18日に森の子児童センターで行われた円卓会議では(1)避難に失敗する理由(2)支援が必要な人の避難(3)若い力をどう生かすかーをテーマに議論した。マップ作りに関わった大城芽衣さん(14)＝神森中3年＝は「避難を实践し、知識を得て工夫をしていくことが大事だ」と述べ、障がい者が諦めずに逃げようと思えるようにする工夫を訴えた。

障がいのある当事者からは「自分で障がいがあることを発信する積極的な姿勢が大切になる」「いろいろな人と関わってコミュニケーションを取れるようにしたい」という声が上がった。

講師を務めた冲国大特別研究員の稲垣暁さんは「中学生の若い力をどう生かすか考えていく必要がある」と述べ、中学生の協力に期待した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

